

# 中世善光寺平の災害と開発

## 開発勢力としての伊勢平氏と越後平氏

Natural Disaster and Development in the Zenkoji Plain in Medieval Times: The Ise and Echigo Taira Clans as Development Authorities

井原今朝男

はじめに

- ①川中島平の洪水災害と御厨開発
- ②伊勢平氏による信濃・越後の所領開発
- ③善光寺周辺の土砂災害と用水路の再開発
- ④越後平氏諸流による信濃・越後の所領開発
- ⑤鎌倉期における京方御家人の活躍

むすびに

### 【論文要旨】

本稿は、長野盆地における大河川の氾濫原・沖積扇状地と山麓丘陵部という対照的な二つの地域における災害と開発の歴史を類型化する試みを提示するとともに、開発勢力に注目して中世社会の災害と開発力の歴史的特質を検討しようとするものである。

前者、大河川の氾濫地域では開発が後れ、ほとんど近世の新田開発によると考えられていた。しかし、近年の大規模開発による考古学調査と用水や地名を中心とした荘園遺構調査など総合的地域史研究によって、10・11世紀における古代の先行した開発が確認され、大河川の洪水災害のあとも、伊勢上分米を開発資本として投資・復興させつつ御厨に編成しようとする動きと、国衙と結んで公領として再組織する動向とが拮抗していたこと。その開発勢力として伊勢平氏の平正弘一門が大きな役割を果たしたことを指摘した。

他方、山麓丘陵部から扇状地一帯に古代の鐘鑄川を利用した条里水田が先行していたが、9・10世紀における土砂災害で鐘鑄川が埋没を繰り返す中で、国衙による条里水田の維持・復興が困難になり、院政期には後序の在庁官人を指揮しうる院権力と結ぶ開発勢力が鐘鑄川を復旧・延長し、周辺部の再開発地に松尾社領や八条院領を立荘していった。さらにその縁辺部の非条里水田地域では、鎌倉～室町期に御家人平姓和田氏や国人高梨氏が六ヶ郷用水という第二次的補足的用水体系を開削して新しい開発地域を拡大していく努力を繰り返した。この開発勢力として院の北面や女院侍として活躍する一方鎌倉御家人をも輩出した越後平氏諸流の存在を「京方御家人」という概念で把握すべきことを指摘した。

地域の開発景観が時代の変遷と開発主体の相違にもとづいて複合構造をなしていたといえよう。